新連載執筆のねらいと執筆者紹介

「台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌」

山西　弘朗

この度の連載テーマは「台湾の社会と文化」、副題は「天理教伝道史と災害民族誌」である。この副題からわかるように本連載は大きな共通テーマを「台湾の社会と文化」とし、具体的には二つの小テーマに分かれている。副題の前者は筆者が2011年に国立政治大学に提出した修士論文「台湾における天理教の信仰形態の変容」（原文は中国語）、副題の後者は東京外国語大学に提出予定の博士論文「台湾先住民村落における災害に関する文化人類学的研究」に基づいている。この連載をとおして、台湾の社会と文化の多様性や複雑性を、その歴史的背景や文化的・民族的背景からミクロとマクロの視点で複眼的に分析することで、これまで一般の日本人には見えにくかった現代台湾社会の動態をリアルに描き出したいと考えている。

山西　弘朗（やまにし　ひろあき）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー。1983年徳島県生まれ。香川大学法学部を卒業後、台湾政府（教育省）奨学金を得て国立政治大学社会科学院（民族学）修士課程へ進学。東京外国語大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。専門は文化人類学、宗教研究。

宗教社会学の会で研究発表

金子　昭

3月6日、宗教社会学の会の2021年第1回研究会が、オンライン形式(Zoom)で開かれた。今回の発表者は2名で、金子が「コロナ疫災と新宗教教団―とくに天理教団の対応とその言説について」、櫻井義秀・北海道大学教授が「創価学会の初期北海道布教―小樽問答と夕張炭労事件をめぐって」というテーマで発表。それぞれ45分の発表に加え、45分の討議が行われた。

私は、宗教教団/教団宗教としてのコロナ禍への向き合い方の事例研究として、天理教がこの1年間、新型コロナウイルスの感染拡大の状況に対してどのように対応してきたか、教団の代表者・有識者、また公的機関紙（誌）に取り上げられた信者の言説について取り上げた。この研究会はふだんは関西圏の参加者が多いが、今回オンライン開催になり、日本各地や海外からも参加があった。

2020年度平和大学講座で基調発題

堀内　みどり

3月9日、WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会の2020年度平和大学講座がオンラインで開催され、堀内が基調発題を行った。昨年度は新型コロナ感染拡大の影響で中止になったが、その講座が繰り越された形で開催された。テーマは、「つながりあう“いのち”とその未来のために―女性宗教者に期待するもの―」。2019年8月、「慈しみの実践：共通の未来のために―つながりあういのち」をテーマに開催されたWCRPの第10回世界大会の趣旨を受け継ぐもので、堀内は、こうした会議での女性宗教者がその存在を目に見える形にし、そうした機会が、女性に活動の場を提供・広げていくこと、また「ケア」のはたらきをより多くの場面で展開させていくに繋がってきていることを述べた。

最後に天理教の「十全の守護」に言及し、人は誰でも「きょうだい」として慈しみあっていけると主張した。休憩を挟み、松井ケティWCRP日本委員会平和研究所所員・清泉女子大学教授、山本俊正WCRP日本委員会理事、河田尚子WCRP日本委員会女性部会事務局長がパネリストとして、それぞれ発題。その後、発題者4名と参加者によるパネルディスカッション・質疑応答となった。

第13回宗教哲学会シンポジウムでパネリスト

澤井　義次

3月27日午後、第13回宗教哲学会学術大会（オンライン開催）のシンポジウム「イスラーム思想と井筒「東洋哲学」」において、シンポジウムの趣旨説明および提題「井筒俊彦と「東洋哲学」構想」をおこなった。このシンポジウムは当初、昨年3月、京都大学で開催される予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大のために延期されていた。

このシンポジウムは、東洋思想・イスラーム哲学の世界的な碩学、井筒俊彦のイスラーム思想をめぐって、井筒哲学の特徴を明らかにするために企画されたものである。澤井による提題のほか、鎌田繁・東京大学名誉教授が「イスラーム思想と井筒俊彦」、東長靖・京都大学教授が「スーフィズム研究と井筒俊彦」と題して提題をおこなった。その後、小田淑子・元関西大学教授のコメントをふまえ、オンラインによる有意義な共同討議がなされた。

ギリシア・アラビア・ラテン哲学会で研究発表

澤井　真

3月27日と28日、オンライン（Zoom）形式で開催されたギリシア・アラビア・ラテン哲学会第5回研究発表会に参加し、「イブン・アラビーの存在流出論における現代的展開」と題して、27日に研究発表を行った。イスラーム神秘主義者であるイブン・アラビーの存在流出や人間の理想的な在り方を論じた完全人間論が、今日のイスラームにおける人間理解に影響を与えていること、そしてジェンダーに関わるイスラーム言説のなかで男性と女性の平等についての議論に用いられていることを考察した。

2日間で合計8発表があり、すべてが大学院生を含む若手研究者によるものであった。そのため、最新の研究成果について情報を共有しながら、活発な討論が行われた。イスラームについての研究発表がこれほどまとまって行われる機会は、日本国内ではほとんどなかった。ユダヤ教やキリスト教を専門とする研究者にとっても、それぞれの思想的な特徴がより明らかとなる点でも新鮮だという感想も聞かれた。